

23

成人T細胞性白血病(ATL)と肺癌の
合併した1例

(内科学第三) 藤本 博昭, 林 治,
蜂巣 将, 内田 博之, 酒井 信彦,
伊藤 久雄

【症例】51才, 女性, 岩手県出身。

【家族歴, 既往歴】特記事項なし。

【現病歴】平成2年3月下旬より腹部膨満感, 発熱を認め近医受診。白血球増多(32000), 肝脾腫, 表在リンパ節腫脹を指摘され, 同年5月8日当科に入院した。

【入院時現症】可視粘膜に貧血黄疸なし。胸部異常なし。肝を5横指, 脾を3横指触知。頸部, 腋窩, 鼠経部にリンパ節を触知。浮腫, 皮疹は認めない。

【検査所見】RBC 394万, Hb 13.3, WBC 31600(異型細胞 58%)。骨髓NCC 15.8万(異型細胞 15.2%)。γ-GTP 154, ALP 822, LDH 450, Ca 8.6。HTLV-1 Ab 10X, HTLV-1 DNA(+), リンパ球表面マーカーはCD2-5増加, CD8減少。胸部X線にて左上肺野に腫瘤状陰影を認め, ⁶⁴Gaシンチにて集積像を認め, TBLBにて腺癌と診断された。

【経過】α-IFN 600万Uにて治療開始。肝脾腫, 表在リンパ節腫大は速やかに消失。白血球数も減少し, 異型細胞の割合も20%前後まで低下した。約2ヶ月後に肺癌の肺内転移を認め, CBPCA, VDS等にて化学療法を施行したが, 癌性胸膜炎を併発し平成3年1月19日呼吸不全にて死亡した。

【考察】HTLV-1感染により免疫能の低下した個体では他臓器癌の合併率が高いと考えられる。今後この様な合併例においては, 手術適応や治療方法と予後の関係など症例を重ねて検討を要すると思われる。

24

眼窩領域腫瘍におけるMRIの有用性の検討

(放射線医学教室)

平林 省二 下山田 和裕 齋藤 和博
長瀬 真紀子 伊藤 直記 石井 巖
松田 裕道 兼坂 直人 小竹 文雄
阿部 公彦 網野 三郎

眼窩病変の診断は、従来CT、超音波が用いられて来たが、近年臨床応用されたMRIは、放射線被曝がなく、任意の断面の撮影が可能で、表面コイルの開発などにより眼窩病変への有用性も報告されつつある。

今回我々は、眼窩内腫瘍性病変20症例にMRIを施行し、その信号強度により腫瘍の鑑別診断が可能かどうかを検討した。また、CTの診断能とも比較検討した。

(対象および方法)

対象は、当院にてMRIを施行し、手術あるいは生検にて病理組織学的診断の得られた10症例と臨床経過から診断された10症例、計20症例で検討した。

方法は、各症例のT1・T2強調像を撮影し、その信号強度について比較検討した。

(結果)

今回MRIの検討では、信号強度に関しては大部分の腫瘍は疾患特異性を認めなかったがMalignant melanomaの例では他の文献でも指摘されている様に特有な信号強度を認めた。

コントラスト分解能の点では、多くの症例で外眼筋、視神経などの関係の理解に優れていた。また、上記のMalignant melanomaの症例ではCTで指摘出来得なかった網膜剥離内の腫瘍部分を確認する事ができた。

しかし、Retinoblastomaの様に石灰化を伴う症例ではCTの方が検出能に優れていた。

今回の検討の結果、眼窩腫瘍の診断には現時点ではCTとMRIの併用が必要と考えられるが、今後、表面コイルや時間短縮の為の新しいPulse sequenceの開発により、眼窩領域におけるMRIの診断能の向上が期待できるものと考えている。